

月例研究会（2024年5月22日）

## 『無産政党の命運』を読む

立本 紘之

法政大学大原社会問題研究所 2023 年度研究叢書として、『無産政党の命運——日本の社会民主主義』が法政大学出版局より刊行された。

本書は、近代日本における普通選挙制度成立に伴い、無産階級の利益を代表する政党として誕生した無産政党を研究対象とする様々な角度の論稿が収録された一冊となっている。

月例研究会では、本書各章の執筆者（一部はオンライン参加）が自身の論稿の紹介・説明を行い、それに基づき質疑応答が行われた。

各執筆者の報告は以下の通りである。

有馬学は、終章「無産政党史研究の現状と課題」を踏まえ、本書につながる共同研究が持つ歴史的な意義や共通の研究の基盤及び、本書の新しさを総括的に整理した。

伊東久智は、第一章「戦間期の「青年」運動と無産政党組織運動」を踏まえ、無産政党運動と青年運動を総合的に捉える研究観点や戦間期日本の青年層に目を向ける意義などを述べた。

杉本弘幸は、第二章「無産政治勢力・国粋会的勢力の支持基盤形成——第一回男子普通選挙 京都第一区を中心に」を踏まえ、党派的な枠を超えた形で近代都市研究と無産政党研究の接続がなされる意味と今後の研究の展望を述べた。

堀川祐里は、第三章「社会民衆婦人同盟の分裂と女性指導者——赤松明子と赤松常子に注目して」を踏まえ、無産政党女性運動を主導した赤松常子・明子の立場・行動の違いや運動組織分裂へと至る流れを説明した。

立本紘之は、第四章「戦前期無産政党における「書記長」・「書記局」の成立・変遷についての一考察」を踏まえ、無産政党書記長・書記局機構の実態・意義と、戦後の革新運動にも影響を与える同機構の功罪を説明した。

福家崇洋は、第五章「社会大衆党結党過程の検討」を踏まえ、無産政党合同を当該期日本における思想交差の一事例と捉える観点や、国家社会主義の影響などを述べた。

渡部亮は、第六章「無党時代におけるポスト新体制運動——旧社会大衆党勢力の動向を中心に」を踏まえ、無産政党解散後の同党関係者による人的結合の存在と、戦中期の彼らの運動が持ち得た射程などを述べた。

堀内慎一郎は、第七章「党本部からみた日本社会党史——戦前無産政党、労働運動、農民運動との連続性の視点から」を踏まえ、戦後日本社会党本部建物に貢献した人脈と、彼らを軽視した社会党のいびつな発展の形などを述べた。

報告終了後に行われた質疑応答においては、中間派無産政党を今考え直す意味・無産政党と競合したアクターの存在などが示された点が、本書の成果として参加者から指摘された。

また参加者からは、これまでの無産政党研究の見取り図に対し本書が与えた意義を明示するよう求める声や、無産政党のイギリス労働党観について問う質問なども出されていた。

なお本書全体の編集者及び、序章「いま無産政党の歴史を問い直す」の執筆者であり、当日研究会の司会も務めた榎一江は、大原社会問題研究所とその所蔵資料の持つ力が本書の刊行にとっては不可欠であったと述べている。

本書刊行を機に、研究所の所蔵資料を用いた研究がさらに進むことを切に願いたい。

（たてもと・ひろゆき 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）